

## 第14回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 奥田 清明

四天王寺国際仏教大学教授

第14回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会常務理事）

2004年10月11日インド大使館

奥田清明博士は、昭和一三年のお生まれで、昭和三六年三月大阪外国語大学インドパキスタン語学科卒業後、昭和三八年東京大学文学部印度哲学印度文学科卒業、昭和四〇年三月に東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了、昭和四三年三月東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程単位取得満期退学。昭和四三年一〇月西ドイツ政府給費留学生（DAAD 給費生）としてハンブルグ大学印度哲学研究室入学、昭和五〇年七月ハンブルグ大学から博士号を取得されました。その後、四天王寺女子大学助教授、四天王寺国際仏教大学教授、同大学副学長、同大学学長代理などを歴任、現在は宗教法人四天王寺執事、社会福祉法人四天王寺福祉事業団評議員、四天王寺国際仏教大学大学院・四天王寺国際仏教大学・四天王寺国際仏教大学短期大学部学長などの要職にあられます。

奥田博士は、東京大学大学院修士課程において、中村元博士を指導教官としてジャイナ教の研究を開始され、昭和四三年満期退学の後、西ドイツ政府の奨学金を得て、ハンブルグ大学でジャイナ教とプラークリット語を、その最高権威であるアルスドルフ教授から学ばれました。やがて奥田博士は、アルスドルフ教授の指示に従い、ジャイナ教空衣派が聖典とみなす『ムーラーチャーラ』(Mūlācāra) 第五章の研究を着実に進められ、学位論文『ジャイナ教空衣派の教義学』(Eine Digambara-Dogmatik) を完成・出版されました。

この論文は、大きくは、「序論」と「テキスト」と「註釈付きの独訳」の三部分よりなっています。まず「序論」において、奥田博士のジャイナ教研究の次のような特筆すべき成果が総括されています。①『ムーラーチャーラ』は一定の構想をもって纏められた書ではなく、それまでに存在していた韻文のテキストないしその断片を編集したものである。②『ムーラーチャーラ』の、成立の前後が不明の現存する二本のテキストの中、ヴァッタケーラ (Vaṭṭakera) に帰せられるテキストが、クンダクンダ (KundaKunda) 作とされるテキストよりも古いものを

伝承している。③『ムーラーチャーラ』のテキストの解明を通じて、従来謎であった空衣派の第二次聖典の成立の事情が解明された。④『ムーラーチャーラ』第五章と、その類似句を含む他の空衣派文献との関係を究明し、『ムーラーチャーラ』第五章のテキストは、空衣派の聖典中最古のものである。⑤『ムーラーチャーラ』第五章の言語の研究から、空衣派の言語に独自性があるとする従来の学説は否定され、『ムーラーチャーラ』の言語は、白衣派聖典の韻文注釈文献「ニジュティ」(*Nijutti*)の比較的新しい層に属する。

つぎに、「テキスト」については、三つの刊本と三写本に基づき、各詩句のテキストの直ぐ下には、異読が示され、脚注には共通の詩句、類似の詩句と参照すべき詩句の所在が示されています。「註釈付きの独訳」は、アルスドルフ教授が直接丁寧に目を通しておられ、信頼すべきものです。

本研究『ジャイナ教空衣派の教義学』は、正しくジャイナ教研究に新生面を開いたもので、ジャイナ教研究に対する大きな貢献であります。ドイツのボレー(Bollee)、フランスのカヤ(Caillat)、ベルギーのデルー(Deleu)、英国のノーマン(Norman)等、ジャイナ教の代表的な研究者がこぞって書評を書き、我が国では故辻直四郎博士、故中村元博士も書評されて、その学的意義を高く評価されたのはまことに当然のことです。

また奥田博士は、その功績に対して、日本では「日本翻訳文化賞」(一九七六)および「日本印度学仏教学会賞」(一九七八)を、さらに外国では、ウィーン大学学長から「ウィーン大学銀栄誉勲章」(一九九〇)を、オーストリア大統領から「学術・研究・芸術に対するオーストリア一等十字勲章」(一九九五)を、ドイツのフルダ神学大学学長から「アドルフ・フォン・ダールベルク勲章」(一九九六)という栄えある栄誉を頂いております。

ドイツから帰られてからの奥田博士は、所属先が四天王寺であり、その経営する大学に勤務する関係上、聖徳太子の思想と伝記、宗教教育のあり方を研究するなど、ジャイナ教の研究にそれほどエネルギーを注がれなかった時期がありますが、『ムーラーチャーラ』第五章以外のいくつかの章を翻訳したり研究したりし、現在は再び新たな意欲を持って、難解なジャイナ研究の前人未踏の領域に踏み込んでおられると仄聞しています。

以上のように、インド哲学・仏教学、とくにジャイナ教における長年にわたるご研究の成果は、誠に顕著なものがあり、そのみならず財団法人東方研究会の理事として、その維持・発展に対するご貢献は、中村元東方学術賞にまことに相応しいものと判断され今回の受賞となった次第であります。